

【研究ノート】

## ベナン共和国の伝統的産婆の役割について

— Atlantique 県 Ouidah 市 Pahou 村の伝統的産婆への聞き取り調査から —

長堀 智香子

### 1. 背景・目的

ベナンにおける妊産婦・新生児死亡率は過去 10 年間、高い状態が続いており、ベナン政府は「妊産婦・新生児死亡率削減国家戦略 2006-2015」の取り組みの 1 つとして、保健施設での有資格者による介助分娩を推奨している。ベナン全体としては施設分娩率 78%と西アフリカ全体と比較して高いが、南部村落部や北部県に関しては 50%以下と低く、政府の意に反し、依然として自宅分娩による出産を住民は選択している。自宅分娩の際の分娩介助者は家族の者や伝統的産婆である。伝統的産婆による介助の場合は、伝統的産婆が産婦の家に来る場合と、陣痛が始まったら近所の産婆の家に産婦が出向き、出産する場合がある。

それでは、伝統的産婆の役割とは分娩介助だけなのであろうか。伝統的産婆の役割について、河合は、フィリピンのミンダオ島民の妊娠・出産観を調査し、その地での産婆の多くは、治療師、祈祷師を兼ねたコミュニティにおける宗教的・政治的リーダーである、と述べている（河合 2006: 15-29）。また、藤掛は、パラグアイの伝統的産婆について調査し、農村に居住する妊婦が伝統的産婆のところで出産するのは、経済的な理由だけではなく、産婆が彼女らの文化を尊重し、薬草や伝統医療に詳しいために、産婆に強い信頼を抱いているためである、と述べている（藤掛 2009: 28-37）。さらに、宮園のインドネシアの例では、伝統的産婆は出産後の儀礼に重要な役割を持ち、同時に、カウンセラー役、ホームドクター役も担っている、と述べている（宮園 2009: 62-73）。これらの例から、ベナンの伝統的産婆も同様に、出産に直接関わる行為以外にも「重要な役割」があるのではないかと思われた。

そこで、評判のよい伝統的産婆を知人から紹介してもらおう事が出来たので、彼女へのインタビューを通し、ベナンでの伝統的産婆の役割について考察する事を目的とし、本研究を実施した。

### 2. 調査対象地の概要

ベナン共和国はアフリカ大陸の中西部の北緯 6 度から 12 度、東経 0 度から 3 度に位置し、国土面積は 114,763km<sup>2</sup>で日本の約 3 分の 1 である。国土の南側は大西洋に面し、東側はナイジェリア国、西側はトーゴ国、北部はブルキナファソ国とニジェール国に接している。人口は 756 万人であり、全土は 12 県に分かれ、北部 4 県（Donga, Atacora, Borgou, Alibori）に総人口の約 30%、南部 8 県（Atlantique, Littoral, Ouémé, Plateau, Mono, Couffo, Zou, Colline）に約 70% が居住している。住居は首都ではコンクリートの平屋が多いが、村落部では日干し煉瓦にわらぶき屋根の家々が並ぶ。さらに奥地では土壁の家も見られる。服装に関しては、男性は現地製の布で作られた「ブーブー」と呼ばれるロングワンピース風の伝統服を正装時には着衣する。女性は同じ布で、上着、腰布と同じ布を頭に巻く。日常の食事は、タロイモやキャッサバが主食で、蒸したそれらのイモを臼でついて餅状にする。副食はトマトペーストのソースに、肉や魚の煮たものや揚げたものを添える。

合計特殊出生率に関しては、ベナン全体で 5.7 人、都市部で 3.7 人、農村部 6.3 人（INSAE

2006) となっている。婚姻に関して法律では、一夫多妻を禁止し、結婚は 18 歳以上から許可されているが、前述のINSAE 2006 では、都市部では約 70~80%が一夫一妻、地方部では 50~60%が一夫多妻、特に南部のCouffo県では約 25%が 3 人以上の妻と婚姻している。また、15-19 歳での妊娠・出産率が南部で 10~20%、北部で 30~50%というデータがあり、両項とも法的効力はあまりないのではないかと思われる。ベナンのリネージ（出自集団）<sup>2</sup>に関して明らかにしている文献は見あたらなかったが、ベナン南部のアジャ社会について調査した田中によると、「アジャは夫方居住婚の父系社会である」と書かれている（田中 2004: 576）。収入に関しては、国民 1 人当たりの国民総生産が 650 ドル（2007 年）、法定最低賃金（SMIC）は約 5000 円（2003 年、5CFA=約 1 円 2009 年為替レート）である。

民族構成は、約 46 部族が混在し、Fon 族 19.9%、Adja 族 8.6%（南部）、Nagot 族 7.1%（中部、東南部）、Bariba 族 8.6%、Peul 族（北部）が 6%となっている。ベナンの民族を言語集団で分類すると、表 1 のとおり、Fon、Adja、Nagot は同じ Kwa 言語グループで総数は 69.9%で最大となる。（Passot 2007: 249-270）

表 1

Kwa 言語グループ	Gour 言語グループ	その他
Groupe Adja <sup>3</sup> :Sahoue,Mina <sup>4</sup> : (15.6%)	Groupe Otamari	Peul/Fulbe <sup>11</sup>
GroupeFon <sup>5</sup> :Goun <sup>6</sup> .,Aizo,Weme,Mahi <sup>7</sup> : (42.2%)	GroupeYoa Lokpa:	Haoussa <sup>12</sup>
Groupe Yorba <sup>8</sup> :Nagot <sup>9</sup> ,Idatcha, (12.1%)	Bariba <sup>10</sup>	Dendi <sup>13</sup>

宗教はキリスト教 35.4%、イスラム教 20.6%、伝統宗教（Vodoun）が 35%である（Passot 2007: 5）。季節は大雨期（4月から7月）、小乾期（8月から9月）、小雨期（10月から11月）、大乾期（12月から3月）と 4 つに分かれ、年間最高気温 29 度（3月）、最低気温 23 度（8月）である。主要産業は農業、都市部での第 3 次サービス業である。ベナンの主な農産物における年間生産量は、キャッサバが 280 万トンとトップで、続いてヤムイモとトモロコシが 200 万トンとなっている。ちなみにイネは 77000 トンである。換金作物はワタが 19 万トン、ラッカセイが 13 万トンとなっている（勝俣 2007: 37）公用語はフランス語で、1946 年よりフランスの海外領土となり、1960 年にダホメ共和国として独立、1990 年にダホメが面していたベナン湾から国名を採用し、ベナン共和国と改名した。

### 3. 研究方法

本調査は、Atlantique 県 Ouidah 市 Pahou 村に住む 67 歳の伝統的産婆に対し、半構造的インタビューを実施し、面接内容を録音した電子データから逐語録を作成し、結果を質的・帰納的に分析した。調査期間は 2008 年 4 月、質問項目は、伝統的産婆になった経緯、村の女性の妊娠・出産期の伝統的行動、分娩時の儀礼、などについてである。インタビューは現地語通訳を介しフランス語で行った。倫理的配慮として、研究の趣旨を説明し、同意を得てから実施した。必要時は写真や実名を掲載する旨も、併せて同意を得た。また、得られた結果は目的以外には使用しない旨も説明し了承を得た。

#### 4. 研究結果・考察

経済首都 Cotonou 市から車で 2 時間くらいの場所に位置する、インフォーマントの自宅にインタビューのために向かった。自宅は日干し煉瓦にわらぶき屋根の家で、居間と産前産後の女性が寝泊りする部屋があり、家の奥に分娩用の寝台があった。屋外には鶏やヤギなどの家畜を飼い、別の場所に畑を所有しており、日中は畑作業に出向いているようである。

インフォーマントについて簡単に以下のとおり紹介する。

氏名：Mme.GBENATINDE Bernadette

年齢：67 歳

部族：Fon 族

宗教：カトリック

在住地：Atlantique 県 Ouidah 市 Pahou 村

村人の数：19,000 人

在住年数：67（生まれた時から）

伝統的産婆としての経験年数：50 年以上



世間話などでインフォーマントの緊張が緩んだ後、まずは、伝統的産婆になった経緯について質問すると、以下のように語った。

「誰から教わったわけでもない。小さい頃、家でお産しているところを見て覚えた。自分の母親はマトロン（伝統的産婆）じゃない。お産なんて人に教わらなくても見てれば出来るよ」

「へその緒を切ったとき、縛らなかつたら、血がたくさん出たので、それからは、切るところの両端を縛って切ることにした」

「切るのはかみそりの刃かはさみ。アルコールとか漂白剤で消毒している」

「そうするようにしたのは、近くに病院（保健センター）が出来て、……いつ頃？ 1983 年ごろ、それから頼まれて、手伝いに行くようになって、10 年通った。1 日 100CFA（25 円）くれるのさ。そこで、覚えた」

「その前は、大昔は、シトロネール（レモングラスの葉）で縛って、ラフィア（枝）で切っていた」

「お産はベッドで仰向けになって産むよ。病院と同じ」

「昔？昔は、いすに腰掛けたり、しゃがんだりして産んでいたよ」

語りの中で、「昔」というのは、彼女が産婆業を行うようになった 50 年前以降から保健センターに研修に行く前の 1983 年頃までの期間を指す。「お産なんて人に教わらなくても見てれば出来るよ」という言葉の背景として、ベナンの職業訓練は「教育」というより、「徒弟制度」の色が濃く、先輩の技術を見て倣いながら修得するという傾向がある。例えば、現在の助産師教育においても、カリキュラム上約 6 割強が臨床実習であるが、実習の現場では、現場の助産師は特に指導せず、生徒自身が実際の介助を見ながら修得している。

次に、その知識と技術を誰かに継承させたかについて尋ねると、以下のように語った。

「娘は2人いるけど。2人ともマトロンにならなかった。下の娘の子供がマトロンになった。でも、助産師の学校にやろうと思っている」

1983年頃から10年間保健センターで研修した際の修了証書を大切に飾っており、自分が近代的な助産ケアを行っている事にプライドを持っているように感じた。マトロンになった孫の助産師学校進学を希望している事からも、「助産師」に対する高い評価が伺える。

続いて、村の女性の妊娠期の伝統的な行動（タブー、水、紐、食べ物に関連した行動、農作業など）について聞くと、以下のように語った。

「妊娠中は別がないよ。あー、腰紐？ あれは、呪術師なので、私は知らない。あ、そうそう、腹の中の赤ん坊の位置が普通じゃなかったら、薬草を煎じて腹の上にかけるよ。（それで直るのか聞いたら、笑いながら）直るよ、直るよ。簡単」

「村の人で、病院に行ったら帝王切開じゃないとだめだ、と言われた人も、うちで産んだらなんの問題もなく産めたよ。なんでか、理由は分からない」

「昔は妊娠中は塩気のある食べ物は禁止していたけど、今は足がむくんだりしなかったら、塩も禁じてない」

「農作業も生まれる前まで行ってもいいよ。途中の検診で問題があれば、行かないように言うけど」

行動変容にかかる妊産婦への負担が少ない「塩分制限」や「妊娠期間の安静」に関するアドバイスは近代的医療の影響を受け変化している。他方、「胎位異常<sup>14</sup>」時に薬草を使うなど、残存している伝統的な方法もある。これが近代的方法へ代替されなかった理由として、産婆の経験から効果を確認しているため、あるいは、妊産婦側の理由として、胎位異常で病院にかかり、臨月まで胎位が頭位に戻らなかった場合、帝王切開になる可能性があり、帝王切開は費用が高く（約2万円）、「腹を切る」という行為に抵抗があるため、「薬草での治療」を希望している事も考えられる。

次に、分娩時の儀礼（出生時に独特の儀礼、呪術があるか）について質問すると、以下のように語った。

「ないよ。私は呪術師じゃないから」

先の質問の際にも、安産祈願のために呪術師から腰紐をもらう習慣について、「呪術師なので、私は知らない」と話された。彼女の話し方から、呪術師のまじないに関し、侮蔑しているようにも感じられた。先にも記したが、彼女は自分が近代的な助産ケアを行っている事にプライドを持っていると思われ、呪術に対し、侮蔑の念を抱くようになったのかもしれない。

「安産祈願のための腰紐」は日本の「腹帯」の慣習に似ている。腹帯の慣習は、平安時代の「源氏物語」の絵巻にも書かれており、古くから行われてきた。効用や是非については多説あるが、杉立は「実用的というより、たぶんに呪術的なものだったろうと思われる」と述べている。また、江戸時代に職業的産婆がお産を管理するようになると、着帯のお祝いには産婆が主賓に招かれた。呪術的意味合いの腹帯着用に関し、産婆も積極的に推奨しており、当時の日本の産婆には「侮蔑」的な感情はなかったと思われる（杉立 2004: 115）。

分娩介助時のお礼について尋ねると、以下のように語った。

「ないよ。タダ。何ももらわない」

「病院で 10 年働いたあとから、お産代は 3000CFA (750 円) とるようにした。薬代とかかかるし、病院と同じだけとることにした。お産の後？ 3 日間、うちにいる。その分はとらない」

「その前 (1993 年前) は、タダ」

病院で 10 年間研修し、修了証書を受けた事に誇りと自信を持っており、助産師と同等の金額をお産代として受け取るようにしたと思われる。1993 年以前は、分娩介助に対する金銭としての対価は要求しなかったが、「お礼」として、鶏や作物を持ってくる産婦も多かったようである。この「礼」は、分娩介助に対する対価、というより、産婆に対する尊敬の意を表しているようにも思われる。現在は分娩費用として決まった金額を支払うようになり、以前のような産婆個人に対する表敬行為は失われたとも言える。

次に、産後の儀礼 (胎盤処置、へその緒、児の命名式、児への割礼、他) について質問すると、以下のように語った。

「胎盤は家族に渡すから、私は関係ない」

「家族は家の水浴び場のところに埋めている。金曜日の時は、Canari (素焼きのつぼのようなもの) に入れて、河のふもとに埋める。そうしないと、その子に問題が起きる。なんで水浴び場かって？ 土の下が涼しくなるから」

「へその緒は、ねずみに齧られないように、庭に埋めて、木を植える。ねずみに齧られると、子供は泥棒になる」

「(児への割礼) 私はしないから知らない。呪術師がする」

胎盤の扱いに関しては、病院でも出産後、家族に渡す。一般的な処理方法は、彼女が話したように、「水浴び場に埋める」であるが、埋める場所は地域によって、庭、玄関、畑などもある。へその緒の扱いに関しては、埋める地域と埋めない地域があり、その理由に関しても地域差が見られる。

次に、産後の儀礼の男女差について聞くと、以下のように語った。

「違いがあるのは、月のセレモニーのやり方だけ。月のセレモニーっていうのは、産後から新月の日まで子供と母親は外に出られない。家の中の部屋に閉じ込められる。新月の日に、親戚のものが子供を月にこうやって (手を上にあげて) 見せるんだ。男は 9 回、女は 7 回、こうやってやる (両手を上下に)。月に子供を紹介するために。それまで母親は、外に出てきては行けない。男の子の時は 9 回呼んだあとに、女の子の場合は 7 回呼んだ後に出てこられる。それから、母親は外に出られるようになる。母親はこの日より前に新月を見てはいけない」

「月のセレモニー」に関しては、都市部ではほとんど聞かれないが、村落部では依然としてその慣習が残っているようである。このセレモニーに関しては、南部村落部の伝統的行動に

ついて調査した Dan Tata も同様に述べている (Dan Tata 2005)。

次に、とり上げた子どもとのその後の関係の有無について尋ねると、以下のように語った。

「しょっちゅう遊びに来るよ。大人になっても来る。その子 (家の中にいた子) も私がとりあげたのさ」

「私がとりあげた子どもが、最近、うちで子どもを産んだのさ」

「遊びに来ると、いろんな相談もされる」

「その子」と呼ばれた小学生くらいの男の子は、彼女の家で出産した女性の育児放棄により彼女が育てているそうである。出産に関わらない期間も含めた長いスパンでの相談役としての役割を果たしている事が分かる。

続いて、死産や障害児が生まれたときの対応について聞くと、以下のように語った。

「死産は家族に渡すから後は知らない」

「赤ん坊は小さいから墓には埋めない。家の中のどこかに埋める。水浴び場じゃない」

「障害児のときは、家族に大学病院に行くように勧めている」

「産んだ子供をいらないって人はめったにいない。そういう人は妊娠した時に、呪術師のところで、薬をもらって、流産させるんだ。私は産まれた子供を殺してくれって頼まれても断るよ。一度、妊娠5ヶ月の母親が、子供がいらないからって、流産させる薬をもらったのだけど、うちで産んだらちゃんと産まれたんだ。500g だったけど、ちゃんと育て、今、学校に行っているよ。親がひきとらないから、私が育てているんだ」

「双子の時は (単胎) より喜ばれる」

死産時や流産児の処理は、都市部でも自宅庭に埋めており、墓には入れないそうである。生まれた後に死亡した場合は墓に入る。1987 年公衆衛生法 (LOI N° 87-015 du 21 Septembre 1987 portant Code de l'Hygiène Publique) により、動物の死骸を庭に埋める事が禁止されたが、死産児や胎盤については、現在までほとんどの家庭で自宅処理している。

捨て子に関して、国としてのデータはないが、捨て子は多いという話は聞く。ベナン国最大の母子病院であるラギューン母子病院 2008 年度活動報告書によると、年間 9 名の児置き去りのケースがあり、うち、2 名は死亡、7 名は施設へ行っている。

次に、分娩時の村人や夫の行動について以下のように語った。

「家族はここにいる (産婆の家。分娩室はその奥にある)。他の人は来ないよ。Co-Epouse (複数の妻たちの事) も来ない」

ベナンはイスラム教 20.6%、伝統宗教 (Vodoun) が 35% であり (Passot 2007: 5)、彼らは一夫多妻制である。都市部では一夫一妻のケースが増えてきているが、村落部や北部では、一夫多妻が多く見られる。複数の妻の関係性は地域によって異なり、彼女が語ったように、出産時に関わらないケースと、出産を助けるケースがある。

## 5. おわりに

本インタビューを通し、従来の伝統的産婆も近代化の影響を受け変化している部分もあるが、住民にとっては「児をとりあげてもらおう」介助者の意味合いだけではなく、出産に関わらない期間も含めた長いスパンでの相談役としての役割を期待しており、その役割期待は、出産をする女性の母親の代からの長い実績から生じていると思われた。また、期間だけではなく、インタビューをしたインフォーマントは妊娠・出産以外の相談事にも対応しており、近代の助産師の枠を超えた重要な役割を担っていると思われた。この伝統的産婆に対する役割期待は、住民の「健康概念」に関連しているのではないだろうか。

「健康の定義」に関しては、1948年に世界保健機関（WHO）が、保健憲章の前文で“Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity”（健康とは、身体的、精神的ならびに社会的に完全に良好な状態にあることであり、単に病気や虚弱ではないことだけではない）（WHO 1948: 16）と定義している。このWHOの健康の定義は、1999年第52回WHO総会において、従来の定義から、spiritualとdynamicの二つの語を新しく加えた、“Health is a dynamic state of complete physical, mental, spiritual and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity”という新しい文章に改める提案がされた。結局、この提案は審議入りしないまま見送りとなったが、改正案をWHO執理事事に提案したのはアラブ諸国WHO東地中海地域地方事務局であった。アラブ諸国では、イスラム教が信仰の中心に据えられ、人々の精神生活から日常行動面の多岐にわたって指導原理となっており、医療健康面においても伝統医学が現在でも実践されているので、spiritualとdynamicを新しく健康定義に盛り込むように提案した。spiritualとdynamicをどのように日本語で表現するかは統一されていないが、意味するところは、独自の文化・宗教を背景とした健康観だと考えられる。出産に関しても、その独自の背景を尊重しながら行いたい、という住民の思いが伝統的産婆への役割期待に繋がっていると考えられる。

## 謝辞

本研究は、国際協力機構（JICA）の派遣により、本調査地において妊産婦・新生児ケア改善の医療協力活動の一環として実施しました。作成にあたりご指導頂きました、札幌国際大学林美枝子教授、ご支援及びご協力頂いたJICA人間開発部母子保健課、JICAベナン支所、ベナン保健省家族保健局、他関係者の皆様、ならびにインタビューにご協力頂いた皆様に深く感謝致します。

## 注釈

- 1) 合計特殊出生率：15歳から49歳の間の年齢階級別のそれぞれの女性が特定の期間において産んだ子ども数を出産可能年齢の生涯において産んだと仮定した場合の子ども数を表している。（国連人口基金 世界人口白書2009）
- 2) リネージ（出自集団）：人類学用語としてのリネージ(lineage)は、父系出自か母系出自に基づく単系出自集団。一人の始祖からその子孫までの系譜関係を成員がはっきり認識している点で、具体的な系譜がより曖昧である氏族とは異なる。  
(<http://kotobank.jp/word/%E3%83%AA%E3%83%8D%E3%83%BC%E3%82%B8>)
- 3) Adja（アジャ）：ナイジェリア、オヨ起源のヨルバの下位集団に属する民族集団であり、13世紀頃に西に移動した。18世紀にアジャは2つの集団に分裂して、1つはトーゴでエウェ（西アジャ）となり、もう1つはベナンでアラダ王国を創設した。（世界民族事典、2000: 17 光文社）
- 4) Mina（ミナ）：17世紀中ごろにアネチョ付近に移動したガとアネという2つの諸要素を含意するときに使われる集会的名称である。彼はトーゴとベナンの商業的、知的、政治的エリートとなっている。（世界民族事典、2000: 667 光文社）
- 5) Fon（フォン）：ベナンに140万人（1993年）、トーゴに約3万5000人（1991年）居住する人々。ベ

- ナン（旧ダホメ）では最大のグループ。フォン語はニジェール・コンゴ語族のクグループに属している。（世界民族事典、2000: 573 光文社）
- 6) **Goun** (グン) : ベナン南部に住む大西洋での漁業も営む農耕民。ニジェール・コンゴ語族のク語派に属し、フォンやエウェに近い。彼らは、首都ポルトノボ周辺をテリトリーとしてベナンでは強い政治的勢力を持っている。（世界民族事典、2000: 244 光文社）
  - 7) **Mahi** (マヒ) : トーゴ、ベナン両国にまたがって居住するトゥイ語グループの農耕民。人口約 10 万人（1987 年）。植民地化以前の時代にダホメ王国における新年の儀式や奴隷交易のための奴隷狩りの主たる対象となった民族集団である。彼らはダホメ王国の中心にある都市、アボメの北に居住していた。（世界民族事典、2000: 645 光文社）
  - 8) **Yorba** (ヨルバ) : ナイジェリア南西部のオヨ、オンド、オシュン、オグン、クワラ、ラゴスなどのヨルバ諸州を中心に隣接するベナンおよびトーゴに居住する巨大グループ。総人口は 2000 万人（1991 年）を超える。（世界民族事典、2000: 725 光文社）
  - 9) **Nagot** (ナゴ) : ベナンのウエメ県とアタコラ県に居住するヨルバグループ。フランス植民地勢力がヨルバの代わりにこの名称を用いた。言語はニジェール・コンゴ語族のうち、クグループのヨルバグループに属している。人口は 1991 年で約 17 万 5000 人。（世界民族事典、2000: 467 光文社）
  - 10) **Bariba** (バリバ) : ブルキナファソ、トーゴ、ベナン、ナイジェリアの北部の広い地域にまたがって居住する農耕民である。人口は 65 万人以下（1988 年）。彼らはナイジェリアのヨルバを起源とする。ブルキナファソ東南部ではグルマ集団のなかに居住する。父系出自。（世界民族事典、2000: 536 光文社）
  - 11) **Peul/Fulbe** (ブル/フルベ) : 古い昔から、ウシ、ヒツジ、ヤギを用いた牧畜になじんでいたようである。起源的には現在の住地であるサヘル地域より北、つまりサハラ地域にいた人々が、サハラの砂漠化に伴って南下してきたと考えられている。西アフリカを代表する牧畜民族。トゥアレグがラクダ牧畜をよくするのに対し、フルベはウシを最も重視する。（世界民族事典、2000: 592 光文社）
  - 12) **Haoussa** (ハウサ) : 北ナイジェリア、ニジェール南部からなるハウサランドを中心に居住しているアフリカ最大の民族集団。アフリカ全域のハウサ人口は約 2200 万人（1991 年）。農耕は、非灌漑畑地でのソルガムとヒエが主。現金作物は綿花とラッカセイが耕作されている。男性のみが農耕に携わる。西アフリカ全域にハウサネットワークを展開し、コーラナッツや肉牛などの流通を支配している。ハウサの女性は結婚すると屋敷内に閉じこもる。婚姻関係は極度に流動的で、求婚、結婚、離婚は 1 サイクルとなって頻繁に繰り返されている。女性の親族間では養子をやり取りする事が多い。（世界民族事典、2000: 500-501 光文社）
  - 13) **Dendi** (デンディ) : ベナン、トーゴ、ナイジェリアの北辺に居住する。ソングイ語を話し、ソングイ王国に起源を持つと主張する。数世紀前には、彼らはキャラバンを組んで、遠くナイル川まで長距離交易を行ったという。今も農耕を営みながら多くが商人である。（世界民族事典、2000: 431 光文社）
  - 14) **胎位異常** : 通常 95%は頭が下向き「頭位」であるが、約 5%は骨盤位（殿位、足位、膝位）などのかたちをとる。骨盤位分娩は早期破水を生じやすく、それによる臍帯下垂・脱出で胎児死亡に陥りやすい。また、感染、娩出時のリスクなどによって、児の死亡（約 5%）、仮死（約 30%）の危険がある。（宮崎和子、前原澄子『母性』、1995: 148-149 中央法規出版）

## 参考文献

Dan Tata, Ousmane

2005 *Aide et Action Collection Societe. Centre de Ressources Documentaires*

藤掛洋子

2009 「アジアの出産 リプロダクションから見る文化と社会 伝統的産婆の役割—パラグアイ」  
『アジア遊学』119: 28-37、勉誠出版

INSAE (Institut National de la Statistique et de l'Analyse Economique)

2006 *Enquete Demographique et de Sante Benin*

勝俣誠他

2007 「西アフリカにおけるマメ類の生産から流通まで—ベナン共和国の事例から域内市場と地域住民の生活向上を考える—」『熱帯農業シリーズ熱帯作物要覧』No.33、国際農林業協力・交流協会



河合利光

2006 「生命を守護する産婆の力 ―ミンダナオ島高地民の伝統医療にみる健康観―」『園田学園女子大学論文集』40: 15-29

宮園夏美

2009 「アジアの出産 リプロダクションから見る文化と社会 子供の誕生における伝統的産婆と儀礼―インドネシア」『アジア遊学』119: 62-73、勉誠出版

Passot, Bernard

2007 *Le Benin*. Harmattan

杉立義一

2004 『お産の歴史』集英社新書

田中正隆

2004 「神とものをめぐる儀礼実践の一形態：ベナン共和国アジャ社会におけるボー ヴォドゥン考」『民族学研究』684: 1-576

WHO

1948 *Official Records World Health Organization: International Health Conference held in New York from 19 June to 22 July 1946*. United Nations

(ながほり・ちかこ／明治国際医療大学 看護学部)